

新収蔵 松木満史が描いた従軍スケッチ紹介と記述からの考察

中村理香¹⁾

Introduction of New Collection Military Sketch And Consideration of description by Manshi Matsuki

Rika NAKAMURA

キーワード：松木満史、従軍スケッチ、新しき村美術展覧会、白樺派

1 はじめに

2017年企画展「松木満史展」をご覧になった松木ルミ氏（松木満史の三女）から、所蔵の松木満史の作品及び関連資料を青森県立郷土館に寄贈したいという申し入れがあり、今年度受け入れた。油絵50点をはじめ、水彩画、スケッチ900点余り、額、スクラップブック等ほか貴重な資料をいただいた。また、ルミ氏が幼少期の頃、絵のモデルをしたことなどのエピソードもつかまり、画家松木満史の人柄や交友関係など、家族でなければ分からないこともお聞きすることが出来た。

松木満史（まつきまんし。1906（明治39）年～1971（昭和46）年は、青森県木造町（現つがる市）生まれ。本名金七。青森に出てはじめ仏像彫刻を学ぶ。棟方志功が設立した「青光画社」に、鷹山宇一（1908～1999）、古藤正雄（1907～1986）、下澤木鉢郎（1901～1986）らと参加した。1923（大正12）年、武者小路実篤の「新しき村」運動の会員になる。1926（昭和元）年上京。1927年国画会に初入選。以降国画会を中心に活動する。画家としての実績を重ねていく一方、1932（昭和7）年から3年間玉川学園中等部で美術の指導にも携わった。また、白樺派の中心人物である武者小路実篤と直接交流する機会を得るなど、人脈の面でも広がりを見せた。1938（昭和13）年、31歳で念願の渡仏を執行する。パリ専門学校で素描等を学ぶが、戦況の悪化と息子の死により1年半ほどでの帰国。短い滞在であったが、フランスで彼が得たものは、明るい光を画面にとどめていく印象派の感覚と手法であった。1943（昭和18）年、松木は従軍画家として北支に派遣。天然痘にかかり1944（昭和19）年九死に一生を得て7月に帰国している。残されている従軍時代のスケッチは、柔らかな筆致ながら、確かな画家の目と技術が、戦場の緊張をよく伝えている。終戦後、家族と上京するが、1947（昭和22）年、単身帰省し、青森市の堤川川べりに小さなアトリエを建てて住む。ここには多くの芸術家仲間たちが集い、サロンのような役割を果たしたといわれる。1955（昭和30）年、三國慶一、中野桂樹、古藤正雄、鷹山宇一といった、戦前からの青森出身の芸術家として第一線で活躍してきた仲間たちと「青生会」を結成、県立図書館で個展を開催する。1959（昭和34）年～1960（昭和35）年、東奥日報紙上に63回にわたり「青森県の素描」を掲載。1959（昭和34）年、第1回青森県文化賞を受賞。棟方志功が中央で評価を高めていく一方で、郷里にとどまり、青森県の美術界の中心となっていく。1961（昭和36）年脳溢血に倒れ、以降筆を執ることなく、1971（昭和46）年、65歳で世を去る。

今回は新たに寄贈になった資料の中から、この度整理した従軍画家としての作品35点を紹介するとともに、そこに残されていた記述から、白樺派との関わりを考察してみた。

2 従軍スケッチの裏に残されていた記述について

今回従軍スケッチの中の2枚に、「新しき村」美術展覧会に関わると考えられる記述が見つかった。（図版③裏 図版⑤裏参照）記述は以下の通りである。

「新しき村美術展覧会」についての記述①（図版③の裏）

新しき村展覧会

美術展覧会前 新宿の紀伊国屋の階上で展覧会を開えたのは昭和二年の夏だったから今年で丁度二十年になる。その時の出品者は斎藤徳三郎や今 巴里にいる原田彦太郎 武者小路先生及び夫人など少品だったが気持ちのいい展覧会であった。

今度村の絵を描く連中で展覧会を開くことにした。最初はデパートの一部か画廊を借りてやるつもりで、段々大がかりに話は進んで美術館で開くことにした。村の絵を描く連中はあまり展覧会に出すことを目的にしていなくて、多く（いわゆる画壇とは縁の遠い人達ばかりだ。が）最近村にも回覧雑誌が出まわってその方の集まりや音楽部も出来たり、絵の批評会が出来たりして若い人も大分集まるようになったので、先生と相談して落選のない気楽な展覧会とえふことにした。それにしても、村の者だけではあまり美術館の会場が大きすぎるので、村の会員でなくとも村に好意を持っている画家、及び吾々が絵を出してもらいたい人をおさそいする事にした。その人達と同じ壁で作品を発表する事は、吾々も大いに勉強になるし自分の力量もをのじと解り、今後の仕事の為になると思うからで。この展覧会の特色はむしろ

¹⁾ 青森県立郷土館 主任学芸主査（〒030-0802 青森市本町二丁目8-14）

「新しき村美術展覧会」についての記述②（図版③の裏）

出品者のうちでも春陽会も国展も二科会 光風会等々 新展の人もあり、年齢の点でも武者小路先生のように六十才以上の人から、他の公募展のように二十才位の若い人もあり。あざやかな旗色のよい處にむしろこの展覧会の特色があるのではないかと思っている。今年は輸送やその他の関係で他方の有望な作家からの集まりが少ないので来年は万全の策を立て、吾々も全力を出したいと思っている。

新しき村の美術展覧会を新宿の紀伊国屋書店で開えたのが昭和二年の夏だから今年で丁度二十年になる。永い年月の 齋藤徳三郎、今は巴里にいる原田彦太郎なども出した。その他沢山あったが、住所不明の者が大分ある。そのかわり新しい仲間も次々できた。

村の絵を描く仲間があまり公募展に出すことを目的にしていなかったので画壇とはあまり縁の遠い人達ばかりだが、最近村にも回覧誌ができて、その方の集まりや音楽部、美術部などもできて若い熱心な人も大分あるので、武者小路先生と相談して落選のない気楽な展覧会を開くことにした。美術館の会場はあまり広いので、村の会員ばかりでなく村に好意を持っている画家と 我々は絵を出してもらいたい人をおさそいした。それらの人達と同じ壁で作品を発表することは楽しみであり、吾々も大えに勉強になるし、自分の力量をおのじと解って今後の仕事の為になると思うから出品者のうちの春陽会も国展 二科 独立 光風会等に

3 白樺派、「新しき村」との関わりについて

2枚の記述は、メモ書きのようであり、誰かに宛てた手紙のようでもある。鉛筆で書かれており、途中書き足した部分や 修正されたところもあり、文脈がわかりづらいところもある。どちらも途中で切れているのだが、内容は昭和2年に新宿の紀伊国屋書店で行われた第1回「新しき村展覧会」から20年後に行う「新しき村美術展覧会」に関する記述のようである。そこでまず、松木の白樺派、新しき村との関わりを辿ってみる。

青森で木彫をしながら洋画への思いを膨らませていた松木は、1923（大正12）年、16歳の時に肋膜炎を患い、半年ほど入院することとなる。退院後は実家の木造で絵画、彫刻、音楽などの勉学に励んだ。このころ読んだ葛西善三と雑誌「白樺」は松木の生涯を決定づけることになる。松木はまた、葛西新八郎（1897（明治30）年～1926（大正15）年）が主宰していた木造の文化サークル「土曜会」に参加していた。葛西は弘前市出身で、弘前中学を出たのち早稲田大学哲学科に学んだ。白樺派に傾倒し、武者小路実篤のもとを訪れてもいる。土曜会は、彼が学んだ白樺派についての知識を参加者に伝達する場として機能していたようである。16歳の松木は年上の先輩達に混じって、常連として熱心に会の活動に参加していた。松木は文化的感度の高い地元の先輩達の指導を受けつつ、自らの感性を高めていった。

松木が土曜会に参加するようになった1923年には、「新しき村」運動への参加もしている。「新しき村」とは、武者小路実篤（1884～1976年）が「人間らしく生きる」、「自己を生かす」社会の実現を目指して、1918（大正7）年に宮崎県児湯郡木城町に設立した共同体である。武者小路の著作や講演を通して紹介され、各地に支部が作られた。

青森でこの運動に共鳴したのは、老舗呉服店の跡取りで後に衆議院議員となった淡谷悠蔵（1897（明治30）年～1995（平成7）年）である。淡谷は義務教育修了後に家業を継ぐが、商人としての暮らしに疑問を感じ、青森市郊外の新城で百姓暮らしを始めた。「新しき村」が開村された翌年の1919（大正8）年には、同地に「新しき村」青森支部を設立している。松木はこの運動に共鳴し会員になった。²⁾ こうして「白樺」に代表されるような当時の新しい思潮を伝える文芸雑誌から先端の西洋芸術の知識を吸収し、美術のみならず文学にも幅広い関心を持ちながら、フランスへの憧れを募らせていった。

また、記載されている人物、齋藤徳三郎、原田彦太郎の経歴と白樺派とのかわりについては以下の通りである。

齋藤徳三郎（1901～1971）は明治34年東京市日本橋で父安太郎・母くわの三男として生まれた。生家は三越デパートの隣にあり、海産加工品を商う豪商の蒲鉾問屋「池上屋」で御曹司として育った。齋藤家には上野の美術学校の学生が寄食していたので徳三郎少年も日本画を学んだ。また、徳三郎は「大正デモクラシー」時代の「白樺派」の芸術家集団と交遊があった。当時、徳三郎は武者小路実篤や柳宗悦等が千葉の我孫子に住んでいて白樺派の芸術集団と親しくなった。白樺派は「個性の伸張を第一とする理想主義」を掲げた。大正3年より我孫子の武者小路家の別荘には白樺派5人組が移り住んだ。武者小路実篤（28歳）・志賀直哉（30歳）柳宗悦（25歳・民芸運動の創始者）・柳兼子（22歳・柳宗悦の妻・日本の近代音楽法を確立した。ベルリンでリサイタルを開きドイツ人を驚愕させた。日本人最高のリード歌手、軍歌を歌うことを拒否する。）バーナード・リーチ（27歳・イギリスの陶芸家・エッチングを初めて日本に紹介する。陶芸家浜田庄司と親交あり。民芸運動に参加する。）徳三郎少年はこれらの人達と交わった。大正7年に徳三郎（18歳）は、武者小路実篤に誘われ宮崎県日向に行き「新しき村」の設立に参加した。「新しき村」は15名の設立会員であった。また徳三郎は、武者小路の「カボチャの絵」の先生でもある。徳三郎は新しき村に後期印象のセザンヌの「風景」とゴッホの「ヒマワリ」の絵を持っていった。親が徳三郎をフランスに留学させるとの話に、それなら絵を買ってくれと頼み4千5百円で購入し新しき村に届けて貰った。岸田劉生とは武者小路実篤を通して知り合いになった。徳三郎は大正13年に岸田劉生が結成した「春陽会」第1回展に出展した。武者小路は徳三郎を大調和会展の事務局主任に任じた。徳三郎の最初の妻は白樺派同人の河野通勢の弟子であった。

原田梨白（1890-1954）。本名は原田彦太郎。東京の魚河岸の長男として生を受けた。ところが稼業の魚河岸を継ぐことなく、白樺派と交

流し、長與善郎や岸田劉生らと特に親交を深めている。一時期、『かぶら屋』なる天婦羅屋を開業。名付け親は岸田劉生。岸田劉生著『劉生日記』にも原田は登場する。その後、絵心と天婦羅道具を持って第二次大戦前のパリへ。そして戦前・戦中・戦後をフランスとドイツで暮らし、祖国の土を再び踏むことなく世を去った。パリ時代は、サロン・ドートンヌにも参加し、街のギャラリーにおいても展覧会（リーフレットの序文は岡本太郎）を開催するものの知名度は低かった。しかし、刊行物では、アジア通の駐日フランス大使ポール・クロードルの著書『DODOITZU』や日本人外交官の父とフランス人の母の娘としてリヨンで生まれた作家 Kikou Yamata（山田菊）の日本の中産階級の恋愛をテーマとした小説『MASAKO』の挿絵も描いている。

両名いずれも「新しき村」の会員で、武者小路実篤と深いかわりを持ちながら、絵を描いていたことがわかる。また、二人ともフランスに留学し、原田は昭和22年の「第1回新しき村美術展覧会」が開かれた時には、松木の記述通り渡仏しておりその後帰国することがなかった。

これまでも、「津軽の美術史」（中畑長三郎著）に、「翌年（昭和2年）から「新しき村美術展」や「国展」を中心に制作を続けてゆく。「白樺」を理論的背景に学んできただけに、武者小路実篤の「新しき村展」や国画会の方角に進んだのは当然でもあった。武者小路とは上京後直接親交を重ねていたようで、しばしば武者小路家を訪ねては語り合った。実篤自身「松木満史画集」の別冊に「松木満史君」の懇切な文を寄せているが、満史の飾り気のない言葉に心うたれた事を書き綴ったものである。」とあるように、武者小路実篤との交流は書かれていたが、この度見つかった記述で「新しき村美術展覧会」を通したより具体的な深い交流の様子が伺える。

武者小路実篤の年譜を見ると

- ・「1927年（昭和2年）42歳 6月 第1回「新しき村展覧会」を新宿・紀伊国屋で開催。『最初にかいた油絵』と記す《南瓜》以後、油絵もさかんに描くようになる。11月 第1回「大調和展覧会」開催。」
- ・「1947年（昭和22年）62歳 5月 京都支部主催の個展を京都・高島屋で、東京支部主催第1回「新しき村美術展覧会」を都美術館で開催（毎年出品）。12月 「武者小路実篤個展」を銀座・シバタギャラリーで開催。この年長与善郎、志賀直哉、安部能成、和辻哲郎、小泉信三らと新しい雑誌発行を計画する。」

とあり、昭和2年に紀伊国屋書店で「第1回新しき村美術展覧会」が開かれたことがわかる。また、昭和22年には東京都美術館で新しき村東京支部主催第1回「新しき村美術展覧会」が開かれた。松木の記述は、この2つの美術展覧会のことだと思われる。

松木から下澤木鉢郎に送られた昭和2年の展覧会の目録と、裏に書かれた手紙がある。目録の中には、この展覧会に「新しき村」に共鳴していた原田彦太郎や斎藤徳三郎の名がある。松木満史は「緑林小景」「村娘」「初夏遊歩」、斎藤徳三郎は「路上スケッチ」、原田彦太郎は「西瓜と茄子」「ヤコブの夢」、武者小路実篤は「番外作品数点」「習作」を出品している。「番外作品数点」の中に、武者小路実篤の初めて描いたとされる油絵「南瓜」が含まれていて、その絵の師が記述にある斎藤徳三郎ということである。全28点と武者小路実篤の番外作品数点が展示された。松木が書いていた通り、出品数は少なく小規模ながら気持ちのよい展覧会だったのであろう。

昭和3年3月5日発行の西北新報の「松木満子氏 作品頒布會」という記事の「松木氏の略歴」の中で、「尚ほ松木氏は昨年5月、武者小路実篤、千家元麿、河野通勢、宮崎丈二、川端信一等と共に「新らしき村の展覧会」を起し、」³⁾とある。松木によって語られたものか定かではないが、この記事も松木が展覧会の企画に携わっていたことをうかがわせるものである。（昭和5年ごろまでは「満子」の表記を使っていた。）

松木は昭和2年の「第1回新しき村美術展覧会」を回想し、20年目の「新しき村美術展覧会」について、構想を練り、企画し、提案事項を記している。場所は、はじめはデパートでと考えていたものが、話がだんだん進んで美術館で開かれることになったようだ。会場が広いために、新しき村の会員の若者だけでなく、村に好意を持っている者、そして、松木ら企画を考えているメンバーが絵を出してもらいたいと依頼する人たちの絵を出品することを考えていた。松木は展覧会を企画するメンバーの一人であり、また、「武者小路先生と相談して、落選のない気楽な展覧会を開くことにした」とあることから、展覧会の主旨を提案し、決定する重要な役割を担っていたと考えられる。また、武者小路先生とも親しい間柄にあることが伺える。「第1回新しき村美術展目録」には会場：東京・上野・都美術館 会期：昭和22年5月23日より5月30日まで 主催：新しき村東京支部とあり、洋画の部に松木満史は「童女立像」を、武者小路実篤は「自画像」「静物」を出品している。また、日本画の部に武者小路実篤は「芍薬」「木食上人作薬師圖」「瓦鶏圖」「野菜圖」「庭園圖」を、下澤木鉢郎は「干鰯」「瑞氣」「青木一枝」「瑞巖將洞窟」「干柿圓座」を出品している。出品総数は、洋画と日本画を合わせておよそ200点にも及び、昭和2年の美術展覧会に比べるとやはり大掛かりなものとなっている。

松木は、昭和2年の「新しき村美術展覧会」では、数少ない14人の出品者の中にいて、斎藤徳三郎や原田彦太郎といった白樺派の名だたるメンバーに名を連ねていることから、20年目の美術展覧会でも、その企画にも携わるほどの存在となり、実行委員として活躍していたのではないかと考えられる。20年目に開かれる「新しき村展覧会」に向けて、会を盛り上げようと心躍らせて構想を練る松木の思いが伝わる記述である。また、この年は有望な作家からの作品の集まりが悪いので、来年は万全の策を講じたいという意欲も示されている。10代で白樺派に触れ西洋の印象派に憧れてフランス留学を果たし、間近でそれらの作品を見て学んだ。そして帰国してますます制作への意欲をふくらませた松木である。白樺派の新しき村のメンバーとして熱き思いを抱いて活動していたのであろう。

しかしこの年の秋このような強い思いを秘めながら松木は青森に帰省することになる。

20年目の「新しき村美術展覧会」を新たに第1回とした背景や、どのような主旨で行われたのか、松木がどのような形でかわっていたのか、まだまだこの記述からだけでは十分解明されたとは言えないが、上京後の松木の「新しき村会員」として先生と慕う武者小路との

関わりや「新しき村美術展覧会」における松木の役割がわかる貴重な資料である。

4 おわりに

今回寄贈になった資料には、ここで紹介した従軍時代のスケッチの他にも、フランス時代のスケッチ、戦後青森時代の県内各地のスケッチ類など、数多くの貴重なものがある。また、絵に対する思いが書かれた記述もある。それらについても今後整理しながら、更に調査を進めていきたい。

5 謝辞

貴重な作品・資料を青森県立郷土館へ寄贈し、調査に協力していただいた松木ルミ氏に心から謝意を申し上げます。

註

2) 青森県立郷土館研究紀要 第41号 松木満史研究のための序論 4 木造・青森時代について 164～165 頁 和山大輔 2018 年 で和山大輔氏は木造・青森時代は松木が画家として、あるいは一人の人間としての価値観を形成する上で重要な経験をした時期であったと述べている。

3) 「松木満子氏 作品頒布會」西北新報 1928-03-05

(参考文献)

中畑長四郎『津軽の美術史』、北方新社、1991 年

青森県立郷土館『松木満史とその時代展』、1991 年

青森県史編さん文化財部会編『青森県史 文化財編 美術工芸』、青森県、2010 年

青森県環境生活部 県民生活文化課 県史編さんグループ編『青森県史叢書 近現代の美術家』、青森県、2012 年

青森県郷土館 研究紀要 第28号「青光画社」考一棟方志功生誕百年にちなんで 對馬恵美子 2004 年

青森県郷土館 研究紀要 第41号 松木満史研究のための序論 和山大輔 2017 年

調布武者小路記念館ホームページ参照 <http://www.mushakoji.org/index.html>

松宮輝明ブログ「武者小路実篤の絵の師 斎藤徳三郎の生涯（15）参照／<https://blog.goo.ne.jp/teruaki-info/c/c6aa0825c29fab016bde33bee2c9cd7e>

「Books&Things andthings.exblog.jp」ブログ参照/<https://andthings.exblog.jp/19223849/>

従軍スケッチ

図版①



水彩 44X31cm

図版②



コンテ 44X31.5cm

図版③



鉛筆 水彩 44X31.5cm

図版④



鉛筆 水彩 44X31.5cm

図版⑤



鉛筆 水彩 44X31.5cm

図版⑥



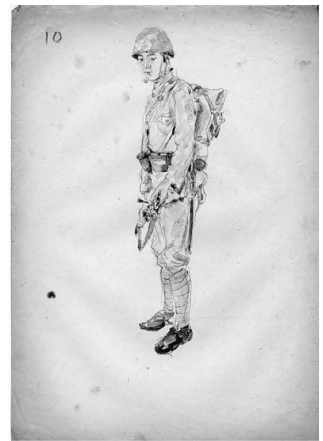
鉛筆 水彩 44X31.5cm

図版⑦



鉛筆 水彩 44X31.5cm

図版⑧



鉛筆 水彩 44X31.5cm

図版⑨



鉛筆 水彩 44X31.5cm

図版⑩



鉛筆 水彩 44X31.5cm

図版⑪



鉛筆 水彩 44X31.5cm

図版⑫



鉛筆 水彩 44X31.5cm

図版⑬



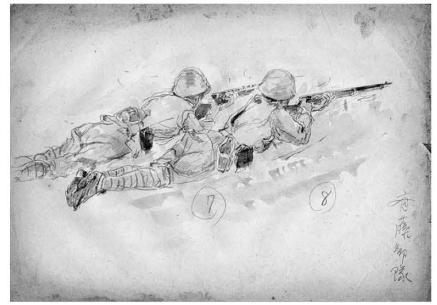
鉛筆 水彩 31.5X44cm

図版⑭



鉛筆 水彩 31.5X44cm

図版⑮



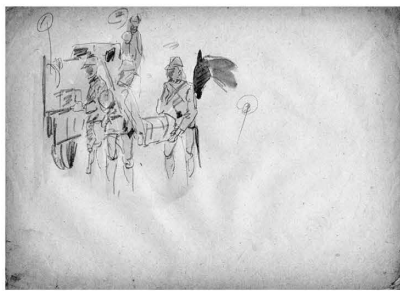
鉛筆 水彩 31.5X44cm

図版⑯



鉛筆 水彩 31.5X44cm

図版⑰



鉛筆 水彩 31.5X44cm

図版⑱



鉛筆 水彩 31.5X44cm

図版⑲



鉛筆 水彩 31.5X44cm

図版⑳



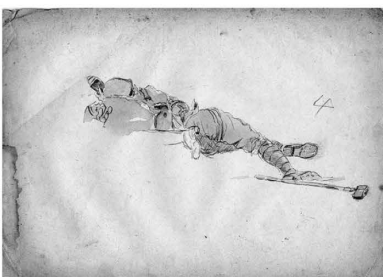
鉛筆 水彩 31.5X44cm

図版㉑



鉛筆 水彩 31.5X44cm

図版㉒



鉛筆 水彩 31.5X44cm

図版㉓



鉛筆 水彩 31.5X44cm

図版㉔



鉛筆 31.5X44 cm

図版②⑤



鉛筆 水彩 31.5X44cm

図版②⑥



鉛筆 水彩 31.5X44cm

図版②⑦



鉛筆 水彩 31.5X44cm

図版②⑧



鉛筆 水彩 31.5X44cm

図版②⑨



鉛筆 水彩 31.5X44cm

図版③⑩



鉛筆 水彩 31.5X44cm

図版③⑪



鉛筆 31.5X44cm

図版③⑫



鉛筆 31.5X44cm

図版③⑬



鉛筆 31.5X44cm

図版③⑭



鉛筆 水彩 31.5X44cm

図版③⑮



鉛筆 水彩 44X31.5cm

図版③5の裏「新しき村美術展」についての記述②

– 176 –